

袋井地域環境厚生施設組合中遠聖苑待合室増設工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査概報

五ヶ山B-2号墳発掘調査概報

1996年

静岡県浅羽町教育委員会

例 言

1. 本書は、五ヶ山B-2号墳の発掘調査概報である。
2. 本古墳は、静岡県磐田郡浅羽町浅名字五ヶ山 2134-151 他 2 筆に所在する。
3. 本調査は、袋井地域環境厚生施設組合中遠聖苑の待合室増設工事に伴う事前調査である。
4. 調査は、静岡県教育委員会の指導の下で、浅羽町教育委員会が行ったが、袋井市教育委員会
森町教育委員会の協力を得た。
5. 調査の体制は以下のである。
調査主体者 浅羽町教育委員会教育長 岡本幸夫
調査担当者 柴田 稔、早川保子
6. 出土遺物の取り上げには、東京国立文化財研究所の青木繁夫氏、浜松市立博物館の川江秀孝
氏、静岡県埋蔵文化財調査研究所の協力を得た。
7. 本書は柴田 稔が編集した。

目 次

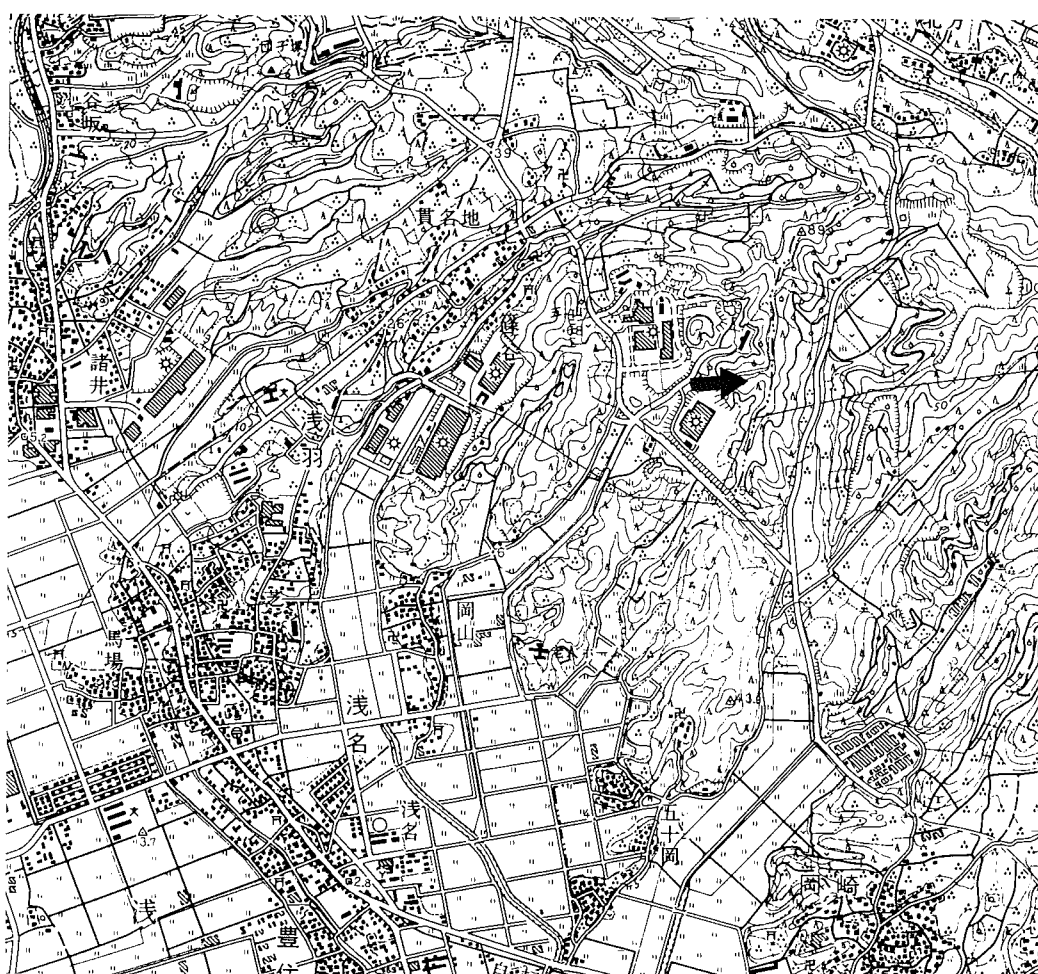
I 調査の経過	1
II 位置と環境	2
III 調査の概要	3
1 外部施設	3
2 埋葬施設	4
3 出土遺物	5
IV ま と め	7

I 調査の経過

袋井地域環境厚生施設組合中遠聖苑は、袋井市、浅羽町、森町による組合立の火葬施設であるが、施設の改良と拡張が必要となり、既に取得していた用地の一部に造成を計画した。本古墳は、この計画に伴って遺跡の確認調査を行い、埴輪を伴う古墳であることが判明したので、発掘調査を行った。しかし、古墳は墳頂部を境にして南側は株式会社共和レザーの所有地であり、開発用地内だけの調査では十分な記録保存ができないと判断し、一部は開発用地外にまで及んで調査を行った。

古墳は浅羽町域に所在していたが、事業の性格が一市二町に関連していたことから、浅羽町教育委員会が調査の主体者となり、袋井市、森町の支援を受けて行った。

調査の組織・期間などは先に記した。



第1図 位置図

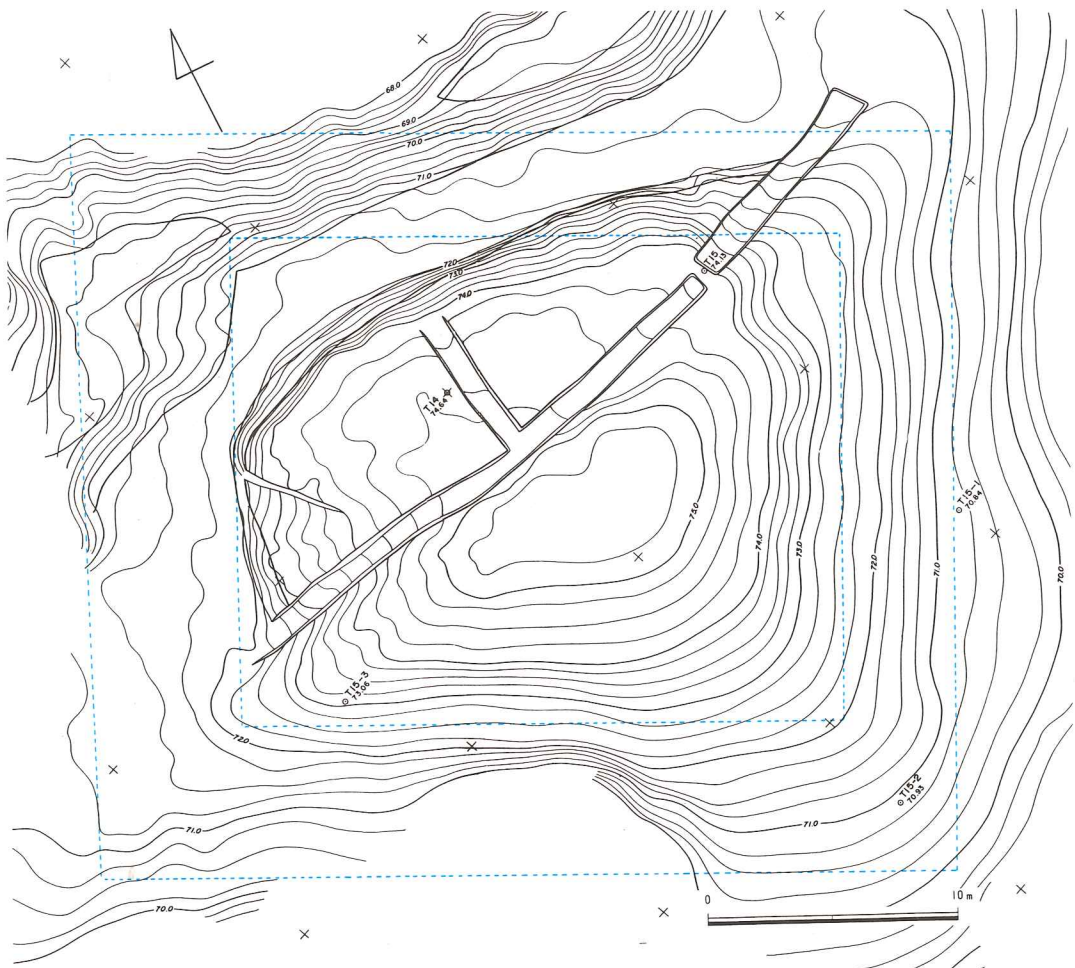
Ⅱ 位置と環境

五ヶ山B-2号墳は、浅羽町浅名五ヶ山2134-151他2筆に所在し、袋井地域環境厚生施設組合中遠聖苑と株式会社共和レザーの所有地である。

本墳は、浅羽町の北東端に近く、標高約75mの丘陵頂部に立地し、広大な浅羽低地から遠州灘までを一望できる。

付近には、五ヶ山B-1、五ヶ山A-1号墳や観音山1～3号墳が立地している。これらの内で、五ヶ山B-1・A-1号墳は、発掘調査の結果5世紀中葉から後半に築造されたものと判明した。また、観音山1～3号墳の一部は前期の古墳とも考えられる。

5世紀中葉頃の豪族居館で、コ字状・ロ字状の建物配置を持つ古新田遺跡は西方約1.5kmの地点にある。



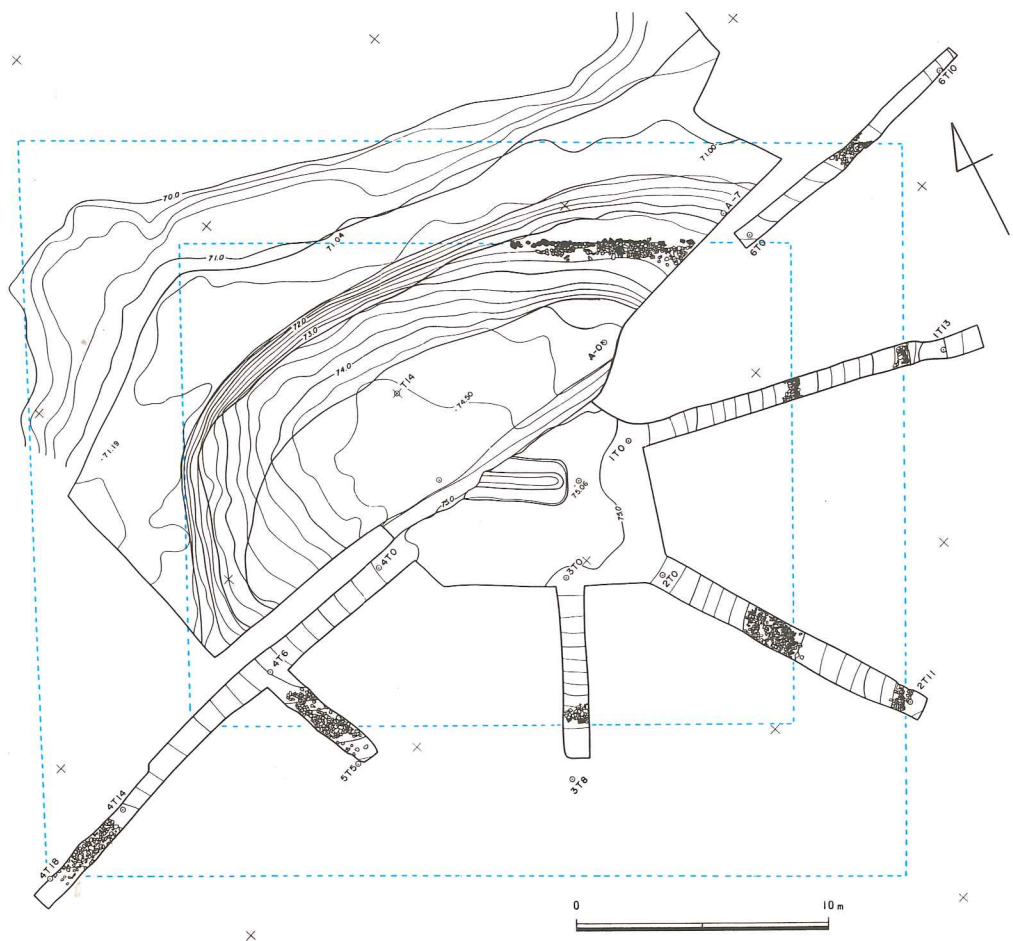
第2図 墳丘測量図（調査前）

この付近の丘陵上に立地する古墳は、外観からは古墳であると断定できないことが多く、先の五ヶ山B-1・A-2号墳も、確認調査によって発見されたものである。また、外部施設が不鮮明な墳丘を持つ特徴がある。この特徴を考慮に入れて、周辺の分布調査をすると、古墳の可能性を持つ地点はかなりの数量になる。

Ⅲ 調査の概要

1 外部施設

開発用地となった墳丘の西半分は、農業パイロット事業の一貫として行われた蜜柑園造成工事のために、大きく攪乱されており、旧状を保つ部分のごくわずかであった。このために、保存される東側半分で行った6本のトレンチ調査で墳丘を復元した。



第3図 墳丘測量図(調査後)

墳丘 地山削り出しで二段に築造され、葺石、埴輪を伴う方墳（やや長方形）である。盛土は全く確認できなかったが、埋葬施設の発見状況からみると、当初から少なかったと推定できる。

墳丘は、尾根の瘤状の地形を利用して造られているが、方墳の対角線が稜線方向となり、一般的な事例とはやや異なっている。また、不整形な部分も多く認められるが、これは地形に制約されたためであろう。

段築の上段は、埋葬施設の主軸方向で約24m、主軸の直交方向で約19mであり、下段は、主軸方向で約34m、主軸の直交方向で約29mである。しかし、下段については、墳形の復元を行うと、南・西側の一部などでは自然地形のままだった可能性もある。

高さは約5.5mであり、その内の上段が約3mである。しかし、場所によって不揃いになる。

上段下端と下段上端との間には若干の平坦部がみられるが、場所によってその規模は不揃いである。たとえば、墳丘南東側に設定した第1トレンチや、南側に設定した第2トレンチでは、上段の下端と下段の下端は、水平距離で約4.5mあるが、この間はほぼ均一な傾斜をもった斜面であり、平坦部は観察されない。しかし、北東側付近では、平坦面が1m以上存在する。

墳頂部の平坦面は、築造後の侵食によるものと思われるが、その範囲を明確にできなかった。

葺石 葺石の残存状況はあまり良好ではないが、上下段共に裾部には人頭大の円礫を並べて仕切り、その上は径10～20cmの円礫を主体にして積み上げられていた。また、縦方向の仕切りは、墳丘北東側の上段で一ヶ所確認されただけである。

埴輪列 上段の葺石崩落部から発見されたが、下段からの出土量はきわめて少量である。また、墳頂部からも少量ではあるが出土し、この中には甲冑形埴輪も含まれている。

原位置を保つ埴輪はみられなかったが、出土位置が墳丘の上の部分である点や、墳頂部からも出土した点などを考慮に入れると、墳頂平坦部の端部に置かれた可能性が高い。

2 埋葬施設

埋葬施設は、墓壇がいわゆる二段掘りの木棺直葬である。

墳頂部の表土直下から発見され、主軸の方位は南北軸から約64°傾斜している。墳丘の復元の結果では、西側の半分弱が蜜柑園造成のために削平されたようである。

掘り方は、幅約1.8m、長さ約4.2m（残存長）で、発見面から深さ0.15～0.1mで棺外の平坦部がある。この平坦部は、左右共に0.4～0.5mで、小口側は0.1～0.2mと狭い。

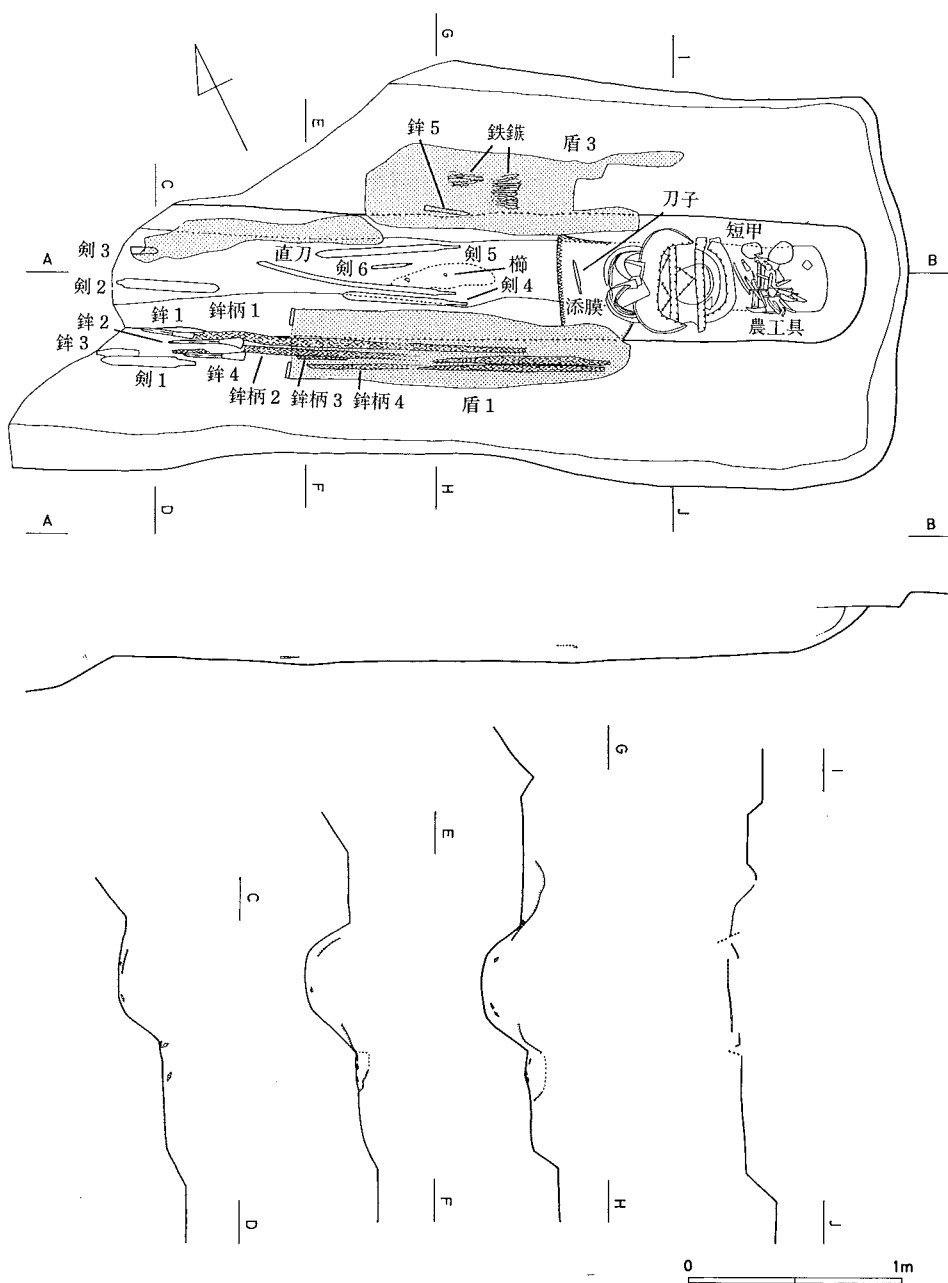
木棺は、この掘り方をさらに掘り下げて埋置されていたようで、中央部だけがさらに深く掘り下げられていた。木棺埋置の掘り方は、幅約0.6～0.5mで東側がやや狭い。深さは、約0.2mで、床の傾斜はほぼ水平である。

棺の掘り方の横断面は割竹形を呈しているが、小口側の断面は明確にできなかった。

棺の方向は、遺物の出土状況から頭位を北よりになっているものと考えられるので、残存していたのは足位側であろう。

3 出土遺物

墳丘、埋葬施設から、埴輪、鉄製品、漆塗り革製品などが出土している。これらの内で、埴輪を除いた全ての遺物は静岡県埋蔵文化財調査研究所で保存処理を行っている。



第4図 埋葬施設実測図

墳丘出土遺物 墳丘からは埴輪が出土した。埴輪には、円筒、朝顔、器財埴輪があり、器財埴輪では甲冑が確認できる他、盾ないしは鞆、あるいは衣蓋の可能性をもつものがある。円筒は器壁の磨耗が激しいために十分な観察ができないが、黒斑のないB種ヨコハケがみられる。

また、墳丘上段北東側などの攪乱層から、直刀、剣、鉾などの破片が採集された。これらは少なからぬ量で、かなりの数量になるものと考えられるが、墳頂部をブルドーザーで削り取った土に混じっており、本来は埋葬施設に副葬されたものであろう。

埋葬施設出土遺物 棺内、棺外（棺身上端面）、棺蓋上から出土している。

棺内からは剣（5）、直刀（1）、刀子（1）、甲冑（1）、農工具（約50）、櫛（2）の他に、種別の判断ができない漆膜が二ヶ所から発見された。

西側小口付近から出土した農工具には、鎌、刀子、やりがんな、のみ、斧、砥石などがある。保存処理中のために明細は不明であるが、鉄製模造品の可能性があるものも含まれている。

短甲は、裾を下にして立て、押付板の上に頸甲、肩甲を装着して置かれたものと思われるが、前方向に倒れていた。また、長側の亀裂の状況を見ると、短甲内に冑が置かれている可能性が高い。従って、発見した状況では主に後胴が見えている。これによると、三角板革綴短甲と考えられる。なお、取り上げた後に前胴を観察したところ、前胴は大型の地板が使用されている部分があった。短甲に接して漆膜の分布する範囲がみられるが、草摺ではないようである。この漆膜の直下に刀子が1点発見された。

棺を復元すると、剣1・2付近が中心と思われるが、これらと剣4・5は切っ先を向かい合わせにしている。剣6は刀子あるいは鉄製模造品の可能性もある。

直刀は内反りしてみえるが、埋積の過程で曲ったものと思われる。

櫛の保存はきわめて悪く、周辺にも漆膜が分布していたが、種別は分らない。

棺外からは鉾（5）、鉄鎌（多数）が出土した。

鉾は棺側の南側から4点、北側から1点出土した。

南側の鉾は、切っ先を西に向けており、漆塗りの柄と共伴している。鉾1と鉾柄1は一見装着状況を示しているようだが、鉾柄1は鉾1の下にまで達しており、別の鉾の柄のようである。また、他の鉾柄も装着関係をはっきりできるものはない。

鉾柄1は、残存長が約1.6 mある。他の鉾柄はこれよりも短いが、いわゆる長柄になるであろう。

北側の鉾には漆塗りの柄が伴っていない。

鉄鎌は、茎を向け合って2束発見されたが、数ははっきりしない。現段階では、無茎のものが1点で、他は全て有茎のものである。また、一部には長頸化したものも含まれている。

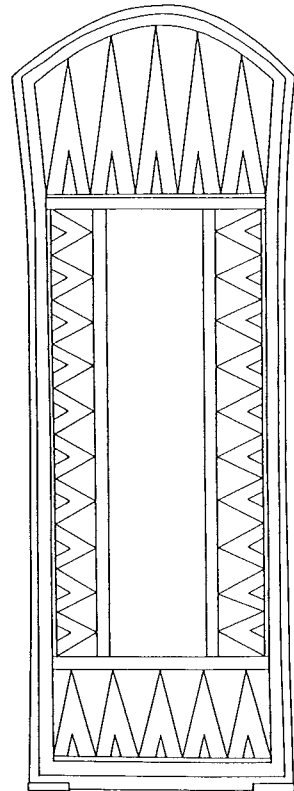
棺蓋上に置かれたと考えられるのは、盾3点である。

GH断面で盾1をみると、棺外に副葬された鉾の柄と盾との間には10cm内外の土がみられる。また、全体の30%程度が棺内に崩れ込んでいる。これらから、盾は棺蓋を土で被覆した後に立て

掛けられたものと理解できる。

盾1は、3点の内でもっとも保存のよいものであるが、盾隅金具と思われる鉄製品を伴っている、また、残存している部分で、高さ約1.6mである。

盾の文様は十分に観察できない部分が多いが、外区は鋸歯文がみられる。



IV ま と め

本古墳は、出土遺物からみると、陶邑編年のTK73～TK216型式併行時期の築造で、磐田市堂山古墳とほぼ同時期と考えられる。また、同一丘陵上にある五ヶ山B-1号墳とは同一時期ないしは若干古い時期であり、古新田遺跡よりは古いといえる。

出土遺物をみると、埋葬施設の半分近くが破壊されているにも係わらず、頸甲・肩甲・冑を伴う短甲、盾、長柄を伴う鉾、農工具の一括出土、器財埴輪など、遠江地方でも有力な古墳の一つと考えることができる。しかし、古墳の規模は同

第5図 盾1推定復元図

(鈴木一有氏作成)

このことは、近畿地方における盾・甲冑を出土する古墳とも共通した内容でもあり、「盾の副葬が甲冑という防御武具と一体化してあるのは、軍事職掌者の葬送に必要な儀仗としての使用もあった。」という勝部氏の指摘のように、堂山古墳の被葬者を頂点とした遠江地方の政治体制の中で軍事を職掌としていた人物の奥津城として本古墳を位置付けることが可能ではないかという視点に立つことができる。

参考文献

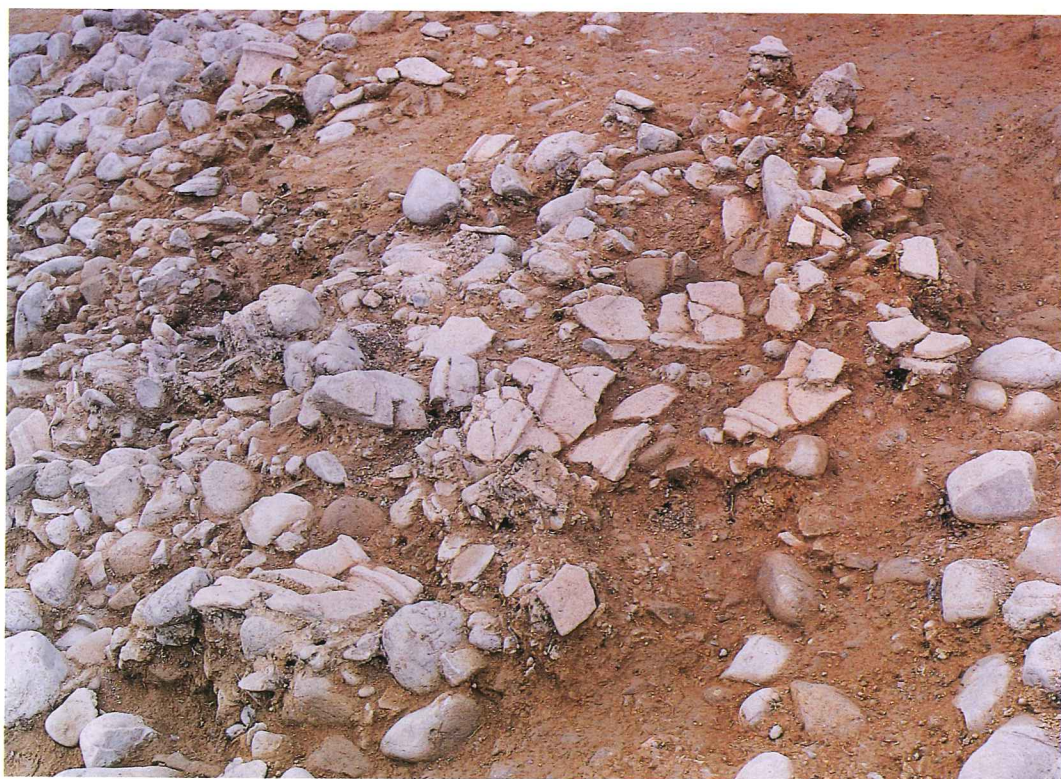
勝部明生 「盾と古墳の被葬者」『日本文化史論集』 1991



墳丘上段葺石



墳丘上段葺石



墳丘上段葺石・埴輪発見状況



墳丘下段葺石（1 T）



埋葬施設全景



農工具出土状況



甲冑出土状況



鉄鐙出土状況



盾 1 ・ 鉾 ・ 柄 など 出土 状 況



墳 頂 部 埴 輪 出 土 状 況

《 報 告 書 抄 録 》

ふりがな	ご か や ま び い に ご う ふ ん は っ く つ ち ょ う さ が い ほ う					
書 名	五ヶ山 B - 2 号 墳 発 掘 調 査 概 報					
編 著 者 名	柴 田 稔					
編 集 機 関	磐田郡浅羽町教育委員会					
所 在 地	☎437-11 静岡県磐田郡浅羽町浅名1028 ☎ 0538 - 23 - 2424					
発 行 機 関	磐田郡浅羽町教育委員会					
所 在 地	☎437-11 静岡県磐田郡浅羽町浅名1028 ☎ 0538 - 23 - 2424					
発 行 年 月	平成 8 年 2 月 29 日					
ふりがな 所収遺跡名	所 在 地	北 緯	東 経	調査面積	調査期間	調 査 原 因
ご か や ま 五ヶ山 び い に ご う ふ ん B - 2 号 墳	しずおかけんいわ た ぐんあさ ぼ ち ょ うあさ な 静岡県磐田郡浅羽町浅名 あさ ご か や ま 字五ヶ山 2134 - 151他 2 筆	34 度 43 分 05 秒	138 度 56 分 52 秒	800 m ²	940516～ 940829	増設工事に伴う 土砂採取
種 別	主な遺構	主 な 遺 物		特 記 事 項		
古 墳	主 体 部	冑甲・革盾・埴輪・鉄製武器、農工具		葺石を貼った二段築成の方墳		

1996年 2 月 29 日発行

五ヶ山B-2号墳発掘調査概報

編集発行 静岡県浅羽町教育委員会

印 刷 磐田市二之宮 251

株式会社 山田印刷所